

人物の外見描写表現

『長くつ下のピッピ』における文型対照調査（日・独・スロヴェニア語）

ゲーテ大学 重盛千香子

0. はじめに

中級日本語（作文）の授業で人物の外見描写の練習をしていると、学生が作る文の中に次のような誤用例があった。

1. *Aさんは小さくて丸い鼻を持っています。

これは、' ~の状態・性質を備えている' という意味で、人の体の部分にも言い及ぶことのできる印欧語の動詞 haben<独>/imeti<ス>/have<英> を日本語の「持つ」に直訳して、外見描写の表現に使ってしまった例で、印欧語圏の学生によくある誤用である。日本語では、次のような文にしたほうが自然だろう。

2a. Aさんは鼻が小さくて丸いです。

2b. Aさんの鼻は小さくて丸いです。

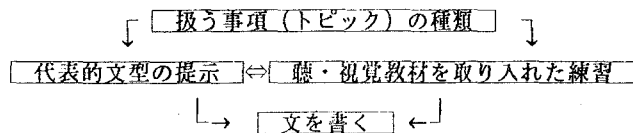
2c. Aさんは小さくて丸い鼻をしています。

ここでは、作文（または類似の中級程度）の授業を進める上で、このような誤用を減らすために、特に海外で日本語を教えている者が学習者のためにどんなことができるかを考える。さらに、ここで考えたことをある程度サポートできるかと思われる文型調査と教材調査を試みた。その結果を述べる。

1. 中級作文授業の進め方（一例）

海外で日本語を学習している者は、リスニングや会話の練習の機会があまりないまま、短期間で日本語文法の基礎を学び、限られた語彙や参考資料を駆使して「作文」の授業に挑まなければならないのが現状である。たとえば、ヨーロッパの多くの日本学科の学生は、日本語を勉強しはじめて数年間（またはわずか数学期間）は、語学コース（いわゆる語学演習）の時間数が比較的小さいが、その後は各専門分野のゼミ形式講義などの比重が多くなり、語学力の持続及び向上は、個人の努力や、日本留学のチャンスの有無などに左右される。そんな中で、「作文」や「中級会話」などの授業を受け持つ語学講師は、限られた時間内で、なるべく効率よく彼らの能力を伸ばしたいと願っている。

筆者が毎年受け持っている「現代日本語中級」の授業は週二コマで、学期末の試験には学生が作文を書くことになっている。授業を進める上では、大体次の図のような手順を頭に描いている。



授業で話題として取り上げる事項を教える側が提示、または学生の希望するものの中から話し合いで決めた後、そのトピックに関係する教材を用意する。学生は最終的には文を

書くわけだが、この中途段階では、なるべく視覚や聴覚に訴える物を用意して、授業時間を活気あるものにしたい。たとえば人物外見描写の場合は、雑誌や新聞から切り抜いた人物・顔写真、また、後に列記する既存聴解教材の利用、それからもちろん、教室にいる教師や学生を描写しあうこともできる。

これらの教材を使って語彙や表現方法を学ぶなかで、トピックごとによく使われる文型を取り上げて提示する。いくつかの典型的な文型を特に時間をかけて示せば、それは印象に残り、学習者がよく使えるようになるだろう。さらに、同じ母語の学習者を教える場合は、よくある誤用を特にマークして、特定の事項（たとえば描写）に使われる日本語の文型が、母語で表現するときに使う文型とは違うことに注意を促すと、誤用も減るだろう。

2. 文型調査

2.1. 調査の動機

冒頭に紹介した「持つ」を使った誤用例は、

- a. Xは□名□が□形□。
- b. Xの□名□は□形□。
- c. Xは□形□ □名□を している。

という三つの日本語の文型に直した。これらの文型は、人物の外見描写をする際の代表的文型だろうか。ほかには、どんな文型があるのだろうか。また、ドイツ語やスロヴェニア語で haben/imeti を使う描写文は、いつもこの三つの文型のどれかに置き換える必要があるのだろうか。

2.2. 対象テキスト

これらの疑問から、『長くつ下のピッピ』A・リンドグリーン作日本語訳のなかで、人物描写をしている部分の文型を調べ、同じ作品のドイツ語、スロヴェニア語訳に使われている文型との比較対照を試みた。

『長くつ下のピッピ』は原作がスウェーデン語の、小学校低学年用の物語である。日本語の文型を調べるのに翻訳されたテキストを使うのは一番良い方法ではないが、ここで対照を試みる三つの言語に共通の同一内容のテキストは限られてしまうので、身近に見つけた物を選んだに過ぎない。

次に、調査の対象にした部分全文を掲げる。（ドイツ語とスロヴェニア語のテキストは参考文献の後を参照）文中括弧でくくってある数字は、文型調査の対象にした個々の表現単位に通し番号をふったもので、この番号が後の表にも使われている。

日本語テキスト

『長くつ下のピッピ』A. リンドグリーン作、大塚勇三訳、岩波書店 1968（9刷）

（第1章 ピッピ、ごたごた荘にひっこす）

（中略）(1) 髪の毛の色はニンジンそっくり。(2) その赤い毛をふたつにわけて、(3) きつく編みあげ、(4) その二本のおさげがびーんとつきだしています。(5) 鼻は、ちっちゃなジャガイモみたいで、(6) そばかすがいっぱい。(7) その鼻の下には、ほんとに大きな口があって、(8) じょうぶな、まっ白の歯がのぞいています。(9) 着ものが、またかわってました。(10) それは、ピッピのお手製でした。（中略）(11) すらっとした、長い

両足には、長靴下をはいていましたが、(12)かたつぽの靴下は茶色で、もうかたつぽは黒でした。それから、(13)足には、黒い靴をはいていましたが、(14)その靴の大きいことといたら、足のちょうど倍もありました。

(中略) (15)それは、しつぽの長い、(16)小さなサルで、(17)青いズボンをはいて、(18)みじかい黄色の上着をきこみ、(19)白いむぎわら帽子をかぶっていました。

(第2章 ピッピー、門にこしかけ、木にのぼる)

「(略) (20) あんたのおとうさんって、どんなようすしてるの? (21) 目は青い?」

(略) 「(22) そんなにのつぽでも、ちびでもなくて、(23) ちょうどいくらいの大きさ?」 (略) 「(24) 黒い帽子で、黒い靴?」 (略) 「(25) その人、はげあたま?」 (略)

「(26) その人、けたはずれに耳が大きくて、その耳が、ずうっと、かたまでたれてる?」

(略) 「(27) そんな大きな耳をした人を、あなた、ほんとにみたの?」

(第9章 ピッピー、コーヒーの会によばれる)

、、、(略) きょうはとくべつなおよばれなので、(28) ピッピーは髪を編まないでおきました。ですから、(29) 赤い髪の毛が、ライオンのたてがみみたいに、顔のまわりにたれさがっていました。(30) 口は、赤いクレヨンで、まっかにぬってあるし、(31) まゆげもまっ黒くぬってあるので、(32) どうもかみつきそうな顔にみえました。(33) 爪も、赤いクレヨンで、ぬりたててありましたし、(34) 靴には、大きい緑のリボンがつけてありました。

2.3. 描写事項の分類と、日本語文型の種類

以下に、上の調査対象の文章から見つかった文型と、それぞれの文型が表す描写事項、そしてその文型が現れた回数を表にして示す(表1)。なお、「描写事項」は、人物外見描写をさらに描写の対象の種類によって、次の三つに分けたものである。

ア. その人全体がどんなか。

イ. その人の身体の一部がどんなか。

ウ. その人がどんな物を身につけているか。

人物の外見描写として、

エ. その人がどんなことをする(している)か。

という項目もさらにたてられるかも知れないが、ここではこれに当たる表現が見あたらなかった。

なお、文型中、Xは外見描写主体(描写されている人物)、名は名詞句、形は形容詞句(形容詞的動詞のテイル形で状態を表しているものも含む)、動一テは動詞のテ形をあらわす。

表 1

文型	描写事項	回数 (34 例中)
a. Xは□名□が□形□。	イ、ウ、	6 例
b. Xの□名□は□形□。	イ、ウ、	9 例
c. Xは□形□ □名□を している。	ア、イ、	2 例
d. Xは□名□を動一ている。	イ、ウ、	7 例
e. Xは□名□だ。	ア、イ、	4 例
f. Xは□名□に□名□がある。	イ、	1 例
g. Xは□名□を動一ておいた。	ウ、	1 例
h. Xの□名□は動一である。	イ、ウ、	2 例
i. Xは□名□に見える。	ア、イ、	1 例
うなぎ文	イ、	1 例

2.4. 日本語テキスト調査で分かったこと、気づいたこと

2.4.1. コーパスについて

『長くつ下のピッピ』は、思いがけないことが起こったり、奇抜な人物が登場する話なので、第一印象では、この調査に適していると感じたが、いざ「人物描写」の表現を探してみると、調査の対象として取り上げることのできる部分の、物語全体に対する比率は小さかった。しかし、これは一般の物語に共通して、描写に終始するのではなく、ある程度の数の登場人物の紹介の後には、その人達の間で起こる出来事の方へと表現を移行して行くためであり、当然である。調査を行う上では、対象の表現数をもう少し多く採りたかったが、34例に終わってしまった。

調査の対象にした文の後半(第9章)の部分は、物語の始めにすでに紹介されている人物ピッピが、この日のパーティーのために、いつもと違った格好をする部分である。そのため、ふつうの場合の外見描写表現と違い、(ある目的・機会のために)「～ておく」、 「～てある」という文型が目だつ。

2.4.2. 文型調査で

合計わずか34例における調査なので、最終的な結論とは言えないが、使用頻度から見て人物の外見描写に用いられるもつとも典型的な文型は a., b., d., e. であろう。文型 c. の使用頻度はこれらに比べて低い。

文型 e. Xは□名□だ。に使うことのできる、人物描写表現に特有の名詞、ちび、のつぽ、はげ、、などの語彙も、このような機会に紹介するといふと思う。文型自体はもつとも初歩的なもので、特に提示して習得させる必要はない。

代表的文型はある程度限られるが、生き生きとした文(読んで楽しく、表現が豊かな文)には、いろいろな文型の使用が必要だろう。この調査では、うなぎ文、g. 動一ておいた、h. 動一である、i. Xは□名□に見える、などの文型も見つかった。

2.5. ドイツ語・スロヴェニア語テキスト調査

『長くつ下のピッピ』の独語訳、スロヴェニア語訳において、日本語の文型調査に取り上げたのと同じ部分の人物外見描写表現を調べた。ここでは、本稿の冒頭に挙げた、学習者の「持つ」を使った誤用例に関連して、主語が描写主体で、独語では haben、スロヴェニア語では imeti（ともに「持っている、所有する、ある状態・性質を備えている」の意）が現れる文を対象テキストからすべて拾い、それを描写事項や日本語の文型とともに次のような表にしてみた。（表2）表中 x が記してあるのは、各表現に独語・スロヴェニア語でそれぞれ「持っている、所有する、など」の意味の haben または imeti が使われているということである。二つの言語の一方には「持っている」に対応する動詞が現れるが、もう一方には現れない場合は、もう一方の言語の構文に「持っている」に代わって現れる語を記した。（ちなみに、ドイツ語 tragen は「衣類・装身具などを身につけている、（髪を）、の型にしている」の意の動詞、スロヴェニア語 biti は英語の to be にあたる繫辞、z/s は「～を備えた、持った」の意味の前置詞。）

表 2

テキスト内番号	描写事項	日本語文型	ドイツ語	スロヴェニア語
(11)	ウ.	d.	x	x
(12)	ウ.	b.	x	x
(13)	ウ.	d.	x	x
(21)	イ.	b.	x	x
(24)	ウ.	うなぎ文	x	x
(25)	イ.	e.	x	biti
(26)	イ.	a.	x	x
(27)	イ.	c.	x	z/s
(28)	イ.	g.	tragen	x

2.5.1. ドイツ語・スロヴェニア語の人物外見描写に使われる haben / imeti

haben または imeti は、描写事項を見ると、イ。（その人の身体の一部がどんなか。）とウ。（その人がどんな物を身につけているか。）の両方の表現に使われるが、この調査では、スロヴェニア語よりドイツ語の方が使用回数がわずかに多かった。

日本語では、描写事項イ.とウ.に共通して使う文型は a., b., d., h. である。（表1参照）簡単な例文を並べてみると次のようになる。

3. Xは目が青い。（a. イ.）
4. Xは服が派手だ。（a. ウ.）
5. Xの目は青い。（b. イ.）
6. Xの服は派手だ。（b. ウ.）
7. Xは髪を染めている。（d. イ.）

8. Xは上着を着ている。(d.ウ。)
9. Xの髪は切つてある。(h.イ。)
10. Xの靴は磨いてある。(h.ウ。)

これらの例文を見ると、次のことに気がつく。文型 a. と b. は、第三者がX(描写される者)を客観的にみて表現するもので、生まれつき体に備わっているもの(目の色、足の長さ、顔の形など)、また、身につけているもの場合は、Xが特に意識せずに着たり、履いたりしてしている物の描写に使われるのではないか。これに反して、文型 d. と h. は、Xの意図、場合によってはXの身近にいてXの身なりの世話をする人の意図を必ず感じる。つまり、文型 d. または h. を使って身体の生まれつきの特徴を表現することはできない。

11. *Xは目を青くしている。
 12. *Xの目は青くしてある。
- しかし、意図的な行為なら自然な表現になる。
13. Xは目を細めている。
 14. Xの目はアイラインで縁どつてある。

ドイツ語とスロヴェニア語で調べた haben/imeti を使った人物の外見描写表現は、上に述べたような日本語の文型の使用範囲の差(生まれつきの状態や、特に意識してつくられていない身なりについてか、それに対して、描写主体、またはその身近にいる者の意図のあるものか)に関係なく、広く使われている。そのため、本稿の冒頭に挙げたように、

1. *Aさんは小さくて丸い鼻を持っています。
- のような、学習者の母語の干渉としての誤用がみられるのではないか。
- 2.5.2. その他、欧文テキスト調査で気がついたこと

日本語には平行した文型がないが、印欧語では前置詞 mit <独>、z/s <ス>、with <英> (「~を持った、~を備えた」)を使う外見描写文も多い。

2.6. ドイツ語、またはスロヴェニア語話者への助言

以上のテキスト調査から、ドイツ語話者、またはスロヴェニア語話者(またはヨーロッパ諸言語話者と言えるかも知れない)に人物の外見描写の指導を行う場合、次のことに気をつけることができると思う。

tragen/nositi の意味(意図的に変えることの出来る身なりや外見)の haben/imeti を使う場合は、文型 d. を勧める。

衣服及び身体部分の形容(色、大きさ)や、客観的描写で、意図性を感じないものなどの場合は、文型 a. か b. を勧める。

(25)の文にも「はげあたま」が出てきたが、2.4.2. でも述べたように、「ちび、のっぽ、、、」などの人物形容特有の語彙をこの機会に紹介する。

文型 c. は、描写事項イ. のみに使われる。文型 a. または b. の言い替えとして提示する。

3. 教材調査

もう一つの調査として、授業で人物の外見描写の練習をする時に使える市販教材にど

んなものがあるか探し、これらの教材と、『長くつ下のピッピ』で行った文型調査との関係を調べた。

最近、日本語教育のための聴解、タスク、ロールプレイなどの補助教材がどんどん作られているが、筆者は日本国外で仕事をしているため、ごく新しい教材はここに紹介することができていないかも知れない。

なお、以下にあげる教材5種は、難易度順に並べてある。(初級学習者用か、中級または上級用か、筆者が判断。I. がもっとも易しく、順にレベルが少しずつ上がる。V. は中・上級用。)

- I. 『絵入り日本語作文入門』C&P日本語教育・教材研究会編、専門教育出版 1990.
10. ～は～が～です (20-21 頁)
- II. 『日本語コミュニケーションゲーム 80』CAGの会編、Japan Times, 1993.
29. その人は目が大きいです (64-65 頁)
- III. 『楽しく聞こう II』文化外国語専門学校、1992.
第 19 課 (1) あの方は誰ですか。(8-9 頁)
- IV. 『絵とタスクで学ぶにほんご』村野良子・谷道まや著、凡人社、1988.
10-2 人物描写 (30 頁)
- V. 『日常生活の分野別 日本語表現便利帳』小笠原信之著、専門教育出版、1991.
§ 1 容姿・容貌 (7-16 頁)

次に掲げる表(表3)は、上に挙げた各教材のタイプ、そして、文型調査で分類した描写事項、及び文型のどれを取り上げた教材であるかを表に示したものである。文型は、その教材で取り上げてある文型のところに x を記した。

表 3

		← 難易度 → +					
教材		I.	II.	III.	IV.	V.	
教材のタイプ		文の完成	タスク	聴解	聴解	語彙-構文	文型
描写事項		イ.	イ.	ウ.エ.	ア.イ.ウ.	ア.イ.エ.	取り上げ 頻度
文型 a.		x	x		x	x	→4
b.			x				→1
c.						x	→1
d.				x	x		→2
e.		x			x	x	→3
f. g. h. i.							→0

上の表では、筆者が現在使っている各教材が、どの文型の提示に役立つかが一目で分かるようになっている。『長くつ下ピッピ』における文型調査での各文型の頻度と、複数の練習教材のチェックにより、人物の外見描写に使うもつとも典型的な文型は、

- a. Xは[名]が[形]。(Xは鼻が丸い。)
- d. Xは[名]を[動-て]ている。(Xは靴をはいている。)
- e. Xは[名]だ。(Xはのつぼだ。)

の三つだと言することができる。文型 b. Xの[名]は[形]。は、文型調査では 9 例と、最も多かったが、練習教材には特に取り上げられていない。また、文型 c. Xは[形][名]をしている。は、難易度から言って一番上の練習教材にだけ取り上げられていることから、ほかの文型より少し高級な言い方と言えるかも知れない。

文型 f. から i. までは、教材には全く取り上げられていない。このうち、g. と h. は、2.4.1. の部で述べたように、特別の文脈に現れる文型で、人物の外見描写に特有とは言えないかも知れない。しかし、外の二つの文型、

- f. Xは[名]に[名]がある。
- i. Xは[名]に見える。

は、前者は身体部分の細かい表現法として、また後者は典型的な比況の表現として(名詞句と並べて「~のよう」、「~そう」などとともに)、人物の外見描写の練習に加えても良いと思う。

4. まとめ

作文の授業では、取り上げる事項によって、よく使われる文型がある程度決まっていると思う。それぞれのとピックごとに、教える側が代表的文型を把握し、大事なものは時間をかけて提示し、さらに学生の母語における文型からの干渉を避けるために、両言語間の文型の違いにも注意を促すと、誤用を減らし、日本語らしい作文を書く練習に役立つだろう。

しかし、いい文(生き生きとした文)、ある意味では個性のある文を期待する場合、特定の文型を強要してしまつては、逆効果になる。文型提示をどの程度強調するか、考える必要がある。

テーマ、トピック別の各種教材開発はこれからもさらに行われて欲しい。この調査で箇条書きにした描写事項や文型をすべて扱っている練習教材はなかったが、それも当り前かも知れない。各教材が対象とする学生のレベルはさまざまであり、場面や条件によっていろいろな教材が使い分けられるのが本当だろう。

参考文献

- 池尾スミ 『教師用日本語教育ハンドブック 1 文章表現』国際交流基金 1974.
- 奥津敬一郎 「言語における普遍と特殊 うなぎ文の世界」『第 7 回日本語教育連絡会議報告 発表論文集』第 7 回日本語教育連絡会議事務局 新潟 1994.
- 砂川有里子 『日本語文法シリーズ 2 する・した・している』くろしお出版、Tokyo, 1986.
- 鈴木忍 『教師用日本語教育ハンドブック 3 文法 I 助詞の諸問題 1』国際交流基金

1978.

Toporišič, Jože: Slovenskaslovnica, Obzorja Maribor 1984.

森田良行 『誤用文の分析と研究－日本語学への提言－』 明治書院、1985.

『日本語教育事典』 小川芳男、林大他編、大修館書店 1982.

『独和大辞典』 小学館1985.

Slovar slovenskega knjižnega jezika II, SAZU, DZS Ljubljana, 1991.

ドイツ語テキスト

Pipi Langstrumpf, Astrid Lindgren, Deutsch von Cäcilie Heinig, Verlag Friedrich Oetinger, Hamburg 1949.

(1) Ihr Haar hatte dieselbe Farbe wie eine Möhre (2)(3) und war in zwei feste Zöpfe geflochten, (4) die vom Kopf abstanden. (5) Ihre Nase hatte dieselbe Form wie eine ganz kleine Kartoffel (6) und war völlig mit Sommersprossen übersät. (7) Unter der Nase saß ein wirklich riesig breiter Mund (8) mit gesunden weißen Zähnen. (9) Ihr Kleid war sehr komisch. (10) Pippi hatte es selbst genäht. (11) An ihren langen dünnen Beinen hatte sie ein Paar lange Strümpfe, (12) einen geringelten und eine schwarzen. (13) Und dann hatte sie ein Paar schwarze Schuhe, (14) die genau doppelt so groß waren wie ihre Füße. ... (15) Es war eine kleine Meerkatze (17) mit blauen Hosen, (18) gelber Jacke (19) und einem Strohhut. "... (20) wie sieht er aus? (21) Hat er blaue Augen?" "(23) Richtig groß, (22) nicht zu groß und nicht zu klein?" (24) "Schwarzen Hut und schwarze Schuhe?" (25) "Hat er eine Glatze?" (26) "Hat er unnatürlich große Ohren, die bis zu den Schultern reichen?" (27) "hast du wirklich einen Mann gesehen, der so große Ohren hat?" (28) Das rote Haar trug sie des besonderen Anlasses wegen offen herunterhängend, (29) und es lag wie eine Löwenmähne um ihre Schultern. (30) Ihren Mund hatte sie mit einem Rotstift knallrot gemalt, (31) und dann hatte sie sich die Augenbrauen mit Ruß geschwärzt, (32) so daß sie beinahe gefährlich aussah. (33) Auch ihre Nägel hatte sie mit Rotstift bemalt, (34) und auf ihren Schuhen hatte sie große grüne Schleifen befestigt.

スロヴェニア語テキスト

Pika Nogavička, Astrid Lindgren, prevedla Kristina Brenkova, Mladinska knjiga Ljubljana, 1985.

(1) Njeni lasje so bili iste barve kot korenček (2)(3) in spleteni v dve trdi kitki, (4) ki sta ji štrleli od glave. (5) Njen nos je bil tak kot čisto majhen krompirček (6) in je bil ves posut s pegami. (7) Pod nosom so čemela hudo široka usta (8) z belimi, zdravimi zobmi. (9) Njena obleka je bila zelo smešna. (10)

Pika si jo je sama sešila.

(11) Na dolgih tankih nogah je imela dve dolgi nogavici, (12) eno pisano marogasto in eno črno. (13) Potlej je imela obute črne čevlje, (14) ki so bili natanko še enkrat večji kot njeni nogi.

(16) Bila je majhna morska mačka, (17) oblečena v modre hlače in (18) rumen jopič, (19) z belim slamnikom na glavi.

(20) "Kakšen pa je?" (21) Ali ima modre oči?" (23) "Ali je ravno prav velik, (22) ne prevelik, ne premajhen?" (24) "Ali ima črn klobuk in črne čevlje?" (25) "Ali je plešast?" (26) "Ali ima nenavadno velika ušesa, ki mu vise do ramen?" (27) "Vprašala sem te, če si videla moža s tako velikimi ušesi."

(28) Zaradi slovesne prilike ima rdeče lase razpuščene (29) in padajo na njena ramena kakor levja griva. (30) Ustnice si je namazala živo rdeče (31) in obrvi si je počrnila s sajami, (32) da je videti kar nevarna. (33) Tudi nohte si je pobarvala z rdečim svinčnikom (34) in na čevlje si je pritrdila velike zelene pentlje.